

マリアッチ・サムライ&マイコサン 15回、世界マリアッチ大会 に参加して！

15° Encuentro Internacional del
Mariachi y La Charrería

2008年9月
記：サム・モレーノ

私たちマリアッチ・サムライとマイコサンは**8月27日から9月5日まで**メキシコはマリアッチ発祥の地グアダハラで毎年開催される世界マリアッチ大会に参加しました。今年は15回目の記念大会に当たります。サム・モレーノとトランプットのシュウゾウ・タケダは第1回目の大会に参加して以来15年振り2度目。ギターのアントニオ中野、ピウエラのカチート寺澤、バイオリンのセシリア瀬尾、マイコサンのルミ、アヤコとショウコ（通訳兼）は初参加。日本代表、総勢8名。

8月27日（水） 成田空港集合1時30分の筈が、通訳のショウコがまだ来ていない。一方受付では、アントニオが、ギターが大き過ぎる云々でもめている。出足からこれでは先々思いやられる出発時でした。ショウコはタクシーを飛ばしてぎりぎりセーフ、ギターは超過料金を払うことで納得。やっとの思いでメキシコに向け、いざ出陣！



ヒューストン経由で約17時間掛けてグアダハラには夜10時過ぎに到着。ホテル・アランサスへ荷物を置き、すぐに近くのタコス屋で空腹を満たす。全員、無事グアダハラに着きました。



8月28日（木） この日はお休みのつもりでいたら、フェスティバルは今日から始まっていてマリアッチ・サムライは夕方4時からサポパンの老人ホームで演奏ということになった。グアダハラを中心よりバスで40分位のところにあり、元気な老人たちが出迎えてくれた。ステージから大音響のカラオケで懐かしい歌が聞こえてきた。その後、ベルギー、エクアドルのマリアッチが先に上がり迫力ある演奏で盛り上げていた。この後ではやりにくい。メキシコでの初舞台でもあるし皆に緊張が走る。尻込みしそうになるが、自分たちの持ち味を出そうと話合い「静かな曲から行きましょう、そうしましょう」最初の「ラス・アラサナス」マイコサンもうまく踊ってるし、サムライもいいぞ、私が日本語で「セ・ジャマ・フジャマ」を歌う頃には、おじいちゃんも、おばあちゃんも遠い日本から来たマリアッチに耳を傾け徐々にノってきた。よしよしこの調子。最後は地元の「アイ！ハリスコ」「ハラベ・タパティオ」で締めると、聴衆から大きな拍手が帰ってきた。初ライブにしては上出来だ。老人ホームから感謝状を戴き、明るいお年寄りに見送られて気分良くバスに乗り込む。私もこんな楽しい老人ホームなら今からでも入りたいくらいだ。



8月29日(金) 2日目の公演はテキーラ村だった。テキーラが飲める、これは楽しそうだ。バスで2時間半も走るとテキーラの原料のマグエイ畑が広がってきた。バスはテキーラ村の手前アマティタンのカサ・エラドゥーラに入った。昔のアシエンダ(荘園)を改造して作った立派なテキーラ工場である。ここは有名なエラドゥーラ社でした。工場見学後に演奏となり、担当者が来て「ショーのスケジュールがいっぱいでサムライは30分にしてくれ」と言われた。ちょっと短い気もしたが、短くスッキリが我々の持ち味なので「いいよ!」と快く答えた。昨日のステージで自信が付いているので、サムライもマイコサンもなかなか受けが良い。私たちのステージが終わる頃には物凄い雨(スコール)が降ってきた。



メキシコの季節は雨季と乾季に分かれていて、今は雨季に入ります。毎日ではないが夕方から2時間位スコールが来てその後はすっかり晴れるのです。ステージ上ではメキシコのマリアッチが演奏して

いて大変なことが起こっている。脇から降込む雨水を箒でかき出しながら演奏している。思わず吹き出してしまったが、これは笑い事ではありません。現実です。テキーラ・エラドゥーラを買い込んでアマティタンを後にした

この日の予定ではマリアッチのレベルを調べる為のオーディションがあると聞いていたが、私たちの帰るのが遅かったのか?オーディションはすでに終わっていたのである。それ以後もサムライは、幸か不幸かオーディションを受けることはなかった。



8月30日(土) 世界中から集まったマリアッチの記念撮影とパレードの日。パレードでサムライを大いにアピールするのが、今回の第一目的ですから、待ちに待った日が来たのです。それにしても、こんなに朝早くからメキシコの写真屋さんには働かないだろうと思うくらい早い午前8時にロビー集合。皆で衣装を着てぶつぶつ言いながらソカロ(広場)まで歩く。日本でこの光景を見たら奇異な集団と思われ警察が飛んでくるだろうね。



ソカロに着くとやっぱり私たちが一番乗り。一時間もするとどこから現れたのか周りはマリアッチだらけ。そして、三大マリアッチの登場、マリアッチ・バルガス・デ・テカリトラン、マリアッチ・アメリカ、マリアッチ・カンペーロスと続く。マリアッチ・アメリカには1997年から7年間、私と、今、ギターを弾いているアプローズのアントニオ中野氏とで日本に招聘していた、マリアッチ・ロス・レジェスの一員だったマヌエルが入っている。当時は21歳だったのが今やメキシコを代表するマリアッチに所属しているとは驚きである。「マヌエル、大出世だ！」



10時近くになり撮影が始まろうとしていた。その時、私のところに太っちょな男が近づいてきて、いきなり名刺を渡され「サムライはこちらに並ぶように」と言われた。名刺には「実行委員長エドガル」とあった。その場所は、何とマリアッチ・バルガスとミス・グアダラハラの後ろ、前列2列目だった。15年前は隅の方だったのに今回は真ん中だよ。世界26カ国、44組のマリアッチ勢ぞろいの記念撮影が行われました。

パレードは4時からなのに2時に集合。案の定、会場には誰もいない。かなり主催者もサバ読んで集合を掛けるようである。時間に几帳面な日本人には余計な配慮です。果たして、待つこと2時間、やっと大御所のマリアッチ・バルガス・デ・テカリトランが現れた。何と今度は、テカリトランがトリの車で、その前がサムライの車だそう。メンバーには日本を

出る時から「皆さん、4キロ近く演奏しながら歩きますので足が痛くなります。今から覚悟をしておいて下さい」と言っていたのに、山車の上で演奏だって、ベルギーなど他の国のマリアッチは徒歩だと言うのにである。これは願ってもないチャンス。サムライ・ニッポンをアピールしない訳にはいけません。



いよいよ、パレードがスタート。山車の上では、サムライともう一組メキシコのマリアッチ・トラディショナルと交互に演奏するのです。まずサムライが演奏を始める。ダンスも山車の上では大変なのにマイコサンも踏ん張って踊る。ふと下を見ると、去年までエル・リンコンでアルバイトをしていたパコと奥さんのユミさんの顔があった。応援に来てくれたのだ。私は懐かしんでいる間もなく「パコ、写真撮って！」と叫んでいました。それからパレード中、貴重な写真を何枚も撮ってくれた。「パコ、ありがとう」。



やがてメインの会場が近づいてきた。アナウンサーが大声で「ただ今、日本から来たマリアッチ・サムライが通ります！」



と紹介してくれて、我々も精一杯、歌い、踊り、演奏しました。沿道から「ハボン、ハボン」の大声援を受けて全身が震える感動を覚えました。そうだ、私は長年この瞬間を夢見ていたのだと知りました。故郷に錦を飾ると言いますが、そんな感じでした。パレードはあとワンブロックで終わる時にすごい勢いで雨が降ってきた。またスコールだ。急いで山車から降りて近くの靴屋さんへ避難。外は雨が強く降っている。店内には雨宿りの沿道の人たちとサムライとマイコサン。皆が珍しそうに我々を見つめる。「いっちょ、やりませんか！」とシュウゾウの軽快なトランペットが鳴る。負けずとセシリアのバイオリンが続く、ピウエラのカチート、ギターのアントニオ、マイコサンもノリよく踊りだす。靴屋さんでライブが始まった。私も声を振り絞って歌う。すごい歓声上がる。何曲歌ったか、もう声が出ない。外の雨はまだ降り続く。人々がこんなに喜んでくれている。皆、懸命に演奏している。「音楽の原点ここにあり」って感じで熱い思いが再び込み上げてきた。熱いメキシコの人たちにノせられた。サムライもマイコサンも熱かった。

びしょ濡れになったが快い気持ちでホテルに戻る。一息ついていると、昨年、エル・リンコンにも来たことのある有名な建築家のアルトゥーロ、オリビア夫妻から、今夜、メキシコ料理店に招待したいとショウコを通じて連絡があった。夫妻はテレビでサムライのパレードを見たそうだ。よし、これはいいタイミングだ。今夜はシュウゾウの還暦祝いをしよう。

その夜が盛り上がったのは言うまでもありません。



8月31日(日) バスで3、4時間、太平洋岸のコリマ州のテコマン、マンサニージョの2ヶ所で公演予定。午後3時テコマン到着。外は暑い、海も近そうだ。公演場所はハルディン(庭園)と聞いていたのでバスから降りてハルディンをチェック。何だ、ここは一体?町田市立の公園みたい?(町田市民のセシリア曰く)、着替えるところはあるの?トイレはどこ?あるには一応ありましたが、男女兼用で用をたしてバケツで水を汲んで流す。これは確かに水洗便所ですが…。大和撫子たちに現場を確かめてもらおうと、やっぱり皆さんやる気を失くしていました。しかし殺風景な公園のステージも準備をしていくうちに何とか格好が付いてくるものです。



夕方6時にはお客さんもぱらぱらと集まって来てテコマン市長の挨拶の後、コロンビアの女性の多いマリアッチで開演。グアダハラハラの学生風マリアッチと続くがイマイチ受けていない。また、雲行き

が怪しくなってきた。やはりサムライの出番の時にとうとう降り始めた。それにしてもよく雨が降る。それも決まってステージの時間に合わせたように。そこんところ少しは時間をズラすとかの対策はないのかね、この国の人は？

全く中止する気配はなく「次は日本からのマリアッチ・サムライ登場！」とオーバーな司会者のアナウンスで私たちは屋根付きの場所から登場。いつもの「ラス・アラサナス」から始める。ダンスで転ばなきゃいいかと心配だったが皆、気合十分、転ぶ気なし。一曲終わると、割れんばかりの拍手。感触は十分。ショウコの司会も益々滑らかになって「フジャマ」を紹介。「エル・レイ」「ラ・ビキーナ」と歌う。お客さんは雨が降っているのに全く帰る気配なし。益々、雨が強くなってきたのでフィナーレの「ハラベ・タパティオ」を演奏して終わりにする。すると「オトラ、オトラ」のアンコール。私が「もっと聞きたいの？」と聴衆に呼びかけると「Si（ハイ）」という大合唱。この雨の中では「しょうがないなあ」と開き直って、私の得意な「ボルベール、ボルベール」を聴衆と一緒に歌った。歌い終わるとテコマン市長が、ミス・テコマンを引き連れて我々のところに飛んできた。大変喜んでもらいました。一緒に記念撮影。はい。ポーズ！ 全員、やや緊張気味。



この後も雨の中を他のマリアッチの演奏が続いていた。雨なんか全然気にしない。こちらの人たちは一体どうなっているのでしょうか？アーメンなんてお祈りしてい

るのでしょうか？ いや、それだけこの日を楽しみにしていたのでしょ



結局、この豪雨でマンザネージョ行きは取り止めになり、先発のコロンビアのマリアッチが引き返すのをバスの中で待ち続けることになる。皆、夜も更けて空腹で騒ぎになり、夜中の12時にテコマン市長のおごりでタコスを食べに行くことになった。空腹も手伝ってか、ここのタコスが忘れられない味になった。やっとコロンビアのマリアッチが戻りグアダハラへ帰ることになった。バスの中で眠っているとピウエラの音で目が覚めた。



やっぱり始まってしまったか！それから延々グアダハラに着く午前3時半までマリアッチの競演でバスの中は大騒ぎ、カチートがぼつり「一年分のマリアッチを聞いた気がする」皆さん、マリアッチ・ロコ（キチガイ）ですね。夜が明けてきて疲れ果てホテルに戻り、眠ろうとすると、今度はルミが興奮してドアを叩く。何事かと思えば、ロビーに張り出している明日の予定表を見たら「マリアッチ・サムライ、明日はデゴジャード出演」と

書いてあると言う。そんなことがある筈がないよ。何かの間違いじゃないの？デゴジャードはグアダラハラ一番の劇場で誰でも出られるところではないよ。初参加のサムライにそんなことある訳ないじゃない？眠い目をこすりロビーに向かう。ここのエレベーターはいつも遅い！確かに書いてある。「9/1 SAMURAI DEGOLLADO」また、眠れなくなってしまった。

9月1日(月) 朝、ショウコがルベン・フエンテスさんの奥さんのイサベルに連絡したところ「そうよ、ルベンが推薦したのよ、良かったね」と言っていたそうだ。やっぱりそうだったか。写真の事といい、パレードの事といい、待遇が良すぎるので気持ち悪かったのがやっと解決した。すべてはマエストロ・ルベン・フエンテスの「日本から来たサムライをよろしく！」の一言が効いているのに違いない。すぐにショウコとルベンさんの大好きなジンをお土産に滞在先のホテル・カミノ・リアルに向かった。当年82歳、マリアッチ・フェスティバルの功労者でドン・ルベン・フエンテスと呼ばれる人です。奥様はベネズエラの人で、例のラ・ビキーナの作詞者でもあります。イサベルさんの為にベネズエラのリズム、ホロボで作られたと言う逸話があります。初めは曲だけでタイトルの歌詞もなかったのだそうです。やっぱり今夜は「ラ・ビキーナ」をデゴジャードで歌おうと決めた。ご夫妻は快くロビーで私たちを迎えてくれて昼間から再会を祝ってテキーラで乾杯。「今夜はサムライの演奏を楽しみにデゴジャードに行きます」と言ってくれました。私たちサムライとルベン・フエンテスさんとの出会いが大変偶然なのです。ルベンさんは昨年6月に家族で日本旅行に來られ、そのガイドを務めたのがショウコだったのです。成田に着いて挨拶を交わし「それでセニョールはメキシコで何をしているのですか？」と質問してしまったから大変、「マリアッチをしてる」と言う返事があると、「私の友達もマリアッチをやってるよ」「ライブがあ

るんだけど行きますか？」そんなやり取りの後、私にショウコから電話があり「サムさん、今、一緒にいるおじいちゃんなんだけど、ルベン・フエンテスっていうの、知ってる？」「え！ホント？そのおじいちゃん、いや、そのセニョールはメキシコの音楽界の重鎮で大変な人ですよ」と答える。それから「ショウコはガイドの仕事そっちのけでマリアッチの話ばかりしていた」とイサベルさんが大笑いしていた。そして、忘れもしない6月12日のエル・リンコンのライブに本当に來られたのです。マエストロには大変サムライを気に入って頂けたようで「グアダラハラで会いましょう」と言って歸られたのです。それから1年2ヶ月が経ち、サムライが本当にやって來たことを心から喜んでくれたのだと思います。正に偶然の賜物です。



そして、今夜、正夢のテアトロ・デゴジャード、デビューの日が來ました。ホテルから歩いても近いのにバスが迎えに來た。楽屋口は厳重な警備でなかなかは入れなかった。写真付の証明書が必要だったのです。ショウコがイサベルさんを見つけて機転を利かして入ることが出来た。大理石の楽屋に案内されてこの劇場が普通の劇場ではないことを認識した。間もなく本番が始まった。オーケストラとマリアッチの共演、そして、往年のスター、マルコ・アントニオ・ムニスのショー。休憩があり、2部の最初がサムライの出演。持ち時間は7分だそう。元気付けのテーマ「アラサナス」が入れられない。「ラ・ビキーナ」とマイコサンのダンス入

りの「ハラベ・タパティオ」の2曲にした。本ベルが鳴る。シュウゾウ、アントニオがぎりぎりでスタンバイ。豪華な緞帳が上がる。ショウコのアナウンスがあり、いよいよ開演。



客席が天井近く5階まである。その天井には宗教画が描かれていた。すぐの脇のボックスを見るとルベンさん、イサベルさんがにこやかに手を振っている。余裕はないが適当に笑顔で答える。これはエライところに来てしまった。もうやるしかない。バイオリンのセシリアのイントロがあり、歌い始めると客席が少しどよめいたような気がしたが構わずに歌い続ける。サムライたちは、さすがにプロだ。シュウゾウ、カチート、アントニオ、5人だけのマリアッチなのに迫力ある音がホールに響く、歌い終わると拍手が快い。さて、次はマイコサン。ステージにはマイクのコードがいっぱい転がっている。大丈夫かな？そんな心配をよそにルミ、アヤコが踊り出した。これまた、どよめきがあった。いい感じだ。客席から手拍子が湧いてエンディングに入った、凄い歓声。そして惜しみない拍手。思わず「やった！」と叫んでいた。

袖で見ていた他のマリアッチもブラボーと言ってくれた。ラジオのインタビューも受けた。ドン・ルベン、イサベル夫妻からも祝福の言葉を受け、何とかマエストロの名に恥をかかせずに済んだという思いでいっぱい。その後、ルベンさんのブースを借りて三大マリアッチのショーを堪能する。帰り際、タクシーの運転手から声を掛けられた。「ラジオで聴いた。

サムライ、良かったよ」ちょっと誇らしい夜だった。



後日談ですが、ショウコが翌日、ソカロに通るかかるとプエルトリコの人から声を掛けられ、「昨夜、デゴジャードに行っていた。入場料も高いので一度だけ、入ったら、サムライが出ていて、ショウコのルベン・フエンテスと出会ってサムライがやっとの思いでこのフェスティバルにやって来たと言う話に感動した。自分もマリアッチをやっていて、いつか自分たちのマリアッチでここに来たい！」などと言っていたそう。やはり、ここはマリアッチの夢の舞台なのでしょう。



9月2日(火) 衣装に着替えて午後2時にロビー集合したが、突然4時に変更。この位はもうすっかり慣れっこになってしまった。そして明日のスケジュールも定かではないので、実行委員会に私たちは着いてからずっと公演が続き、市内もろくに見ていない、最後の一日はお休みが頂きたいと申し出た。すると簡単にOKが出た。このあたりの融通の利くところ

がメキシコである。「皆さん、今日が最後の公演ですから頑張りましょう」と伝え
ると、ホント、信じられない？という雰
囲気でした。公演先のプラサ・メヒコと
いうショッピングモールはバスで30分
のところにあった。メキシコシティから
来たマリアッチと一緒にの公演。着くと
もうセンターのホールにはお客さんで一杯
溢れていた。主催者から「どちらが先に
始めますか？」と言うので、そんなこと
も決まっていなくていいの？と言いた
いところですが「はい、サムライが先
にやりま〜す。」サウンド・チェックも
リハーサルもないまま始まっていく。
メキシコはどこもこの調子。これだけ
は慣れてきても少し戸惑う。ステージ
は、ここでも日本から来たということ
もあり沢山の拍手をもらい最後の公
演を終えた。夜、また、建築家のアル
トゥーロ、オリビア夫妻より今度は
日本料理スエヒロに招待して戴きま
した。そろそろメキシコ料理に飽きて
いたサムライとマイコサンには久し振
りのお寿司の味に大満足。娘さんのア
プリールさんが今日のプラサ・メヒコ
のステージを録画していてビデオを見
ながら食事を楽しんだ。



9月3日(水) 日本を発って、まだ1週
間なのに、ずっとグアダハラにいる気
がしているのは何故だろう？今日は自由
行動。買い物に行く人、メトロに乗り
に行く人、眠る人、観光する人。夜はサ
ムライの打ち上げをマリアッチとダンス
の見られるレストラン、カサ・デ・マ
リアッチで開いた。大成功と呼べるフェ
スティバル参加に乾杯。明日はホテル
出発、

午前4時なので早々に引き上げる。もう
寝る時間はほとんどない。



9月4日(木) 予約してあったワゴン車
が30分前にホテルに到着。運転手は8
人分の大荷物を文句ひとつ言わずせっ
せと車に入れて時間通りに空港に運ん
でくれた。料金を払うと領収書をちゃん
と用意をしていた。最後に几帳面で真
面目なメキシコ人に出会った。思わず
チップも弾んでしまった。全員、怪我
もなく病気もなく成田に着き一安心。
また、15年後にフェスティバルに参
加しようとして各自、家路に急いだ。

